

発行代表者：鎌田 龍児

編集代表者：松坂 定徳

印刷：奥野印刷

2014.02

関西岩手県人会

〒530-0001 大阪市北区梅田 1-3-1-900 大阪駅前第 1 ビル 9F 岩手県大阪事務所内

【TEL&FAX】06-6344-5969

【ホームページ】<http://www.iwate-kansai.com/>

H26 年度総会＆新年会
盛大に開催!!

60 周年に向け心ひとつ

平成 26 年度の総会および新春懇親会は、1 月 26 日(日)に例年通り大阪市北区西天満の「スーパードライ梅田店」にて開催された。出席者は新会員 6 名を入れて 70 名を超える盛況であった。



===== 総会議事内容 =====

午前 11 時より別室に準備された総会会場で、藤井 勝副会長の司会により開会が宣言され、恒例により鎌田 龍児会長が議長に選出され審議に入った。なお、審議に入る前に鎌田会長より以下のような挨拶があった。「今年も県人会としていろいろ活動計画がありますが、それを遂行するに当たり特に私の方からお願いがあります。後で事務局長から話しがありますが、県人会の財政は非常に厳しい状況にあります。昨年度からバナー広告を募集して大変助かっておりますが、今もご協力できる会社がありましたら是非ご紹介いただきたい」。

I. 第 1 号議案 平成 25 年度事業報告、同決算報告

深田 稔事務局長（兼副会長）から以下の事業内容の報告があった。

<定例事業活動概要>

平成 25 年度は新旧役員顔合わせを入れて 5 回の会合を持ち、県人会運営について討議した。昨年度総会・新春懇親会は 1 月 27 日（日）、ご来賓として達増 拓也岩手県知事、法善寺の神田 真照師を迎えてスーパードライ梅田にて開催、73 名の出席であった。恒例の京都円山公園における京都岩手県人会との合同お花見は悪天候が予想され急遽中止となつたが、青森、秋田との 3 県合同納涼ビアパーティーは、本県が幹事となり 7 月 21 日に開催された。合計 105 名の出席で本県からは 48 名と多数出席いただいた。県人会報のイーハトーブは 22 号、23 号、24 号と予定通り 3 回発行できた。北海道・東北 6 県対抗ゴルフ大会は団体 3 位と健闘した。

<郷土の応援、支援>

春の選抜高校野球は盛岡大学付属高校が、甲子園出場 10 回目にして東京安田学園に勝ち悲願の初勝利をあげた。夏の大会ではおなじみの花巻東高校が、すば抜けた選手がないにも関わらずベスト 4 に進出した。年末の花園ラグビー場における全国高校ラグビー大会では 2 年連続の黒沢 尻北高校が 1 回戦を快勝した。本会はそれぞれ宿舎に出向い祝い金、記念トロフィーをさしあげ、鎌田 龍児会長や岩手県大阪事務所の猪久保 健一所長他の激励の挨拶および同事務所の山本 和広主任のエールで激励した。猛暑の夏または雪のちらつく師走に応援に駆けつけた皆さんにお礼を申し上げる。関連団体の行事にも多くの参加者があり、9 月 21 日比叡山延暦寺での宮沢賢治 81 回忌法要には、本会から 22 名（全体 49 名）の参列者があり、11 月 9 日の京都清水寺におけるアテルイ・モレの法要には 25 名（全体 120 名）の参列者があった。

<東日本大震災復興支援>

平成 25 年度に本会に寄せられた義援金総額は

¥1,012,485 であった。震災 2 周年に際し「震災を風化させない」との目的で、3 月 9, 10, 11 日の 3 日間、梅田、神戸、難波において、宮城・福島との 3 県合同街頭募金を実施した。金額の多寡には拘らないとしていたものの、総額 ¥1,584,573 と予想以上の義援金があつまり 3 県のボランティアを感激させた。本会関連イベントでの募金や個人および所属する地域団体からも温かい義援金が寄せられた。また、各地での震災関連法要、復興祈願祭、復興イベントに参加、また、後援団体に名を連ねた。

<本会 60 周年記念事業準備委員会>

3 回にわたり審議いただき、その調査、提言に基づき第 4 回役員会（12 月 18 日）にて、来年の総会および 60 周年記念祝賀会は「平成 27 年 2 月 11 日（水、祝日）」と決定した。多くの方の出席を期待します。準備委員会メンバー（○藤井 勝、堯 律子、中村 滋、和賀 亮太郎、濱本 昌範、山本 幸子、中西 文枝、○平野 良夫の各氏。○印：委員長、○印：事務局）

<サイト運営>

関西岩手県人会のホームページは本会会員の山本 幸子氏の関連会社に管理運営をお願いしている。昨年より鎌田会長の他、有志会員のご厚意により 4 件のバナー広告をいたしました。1 件 50,000 円／年で制作費を差し引いて約 ¥150,000 の収入があり、25 年度会計に大いに役立った。県人会トピックスや県人会広場は誰でも参加できるので、閲覧・書き込みを期待します。

<平成 25 年度決算報告>

年会費は未納者が少なからずおり収入が伸び悩んでいる。収入で特筆すべきことは、前述のバナー広告収入が約 ¥150,000 強ありこれにより赤字決算を免れたこと、柏山 喬顧問から ¥100,000、藤井 勝氏、奥村 昭吾氏からも含め ¥114,000 のご寄付があったことである。支出では前年同様に広告費、補助金を限定、故佐々木 登氏（元副会長兼事務局長）にお供えを持参し弔意を表したこと、ご寄付によりパソコン一式を更新、事務用品費は用紙、封筒を 2 年分購入、事務局交通費は業務が少ない時は 3 人が交代で休むなどして節約に努めた。監事を代表して鈴木 政人氏より、関係帳簿および証拠書類等を点検監査の結果「問題なし」との報告があり、第 1 号議案は拍手をもって承認された。

II. 第 2 号議案 平成 26 年度の事業計画および収支計画

事業計画はほぼ昨年と同じであるが、27 年度の本会創立 60 周年記念事業の準備、27 年度役員改選の候補者受付業務が加わる。なお、新会員勧誘、会員維持のため、個人メールの把握に努め復興だよりやイベントなど多くの情報を紹介する方針を示した。26 年度の収支計画は、現時点でバナー広告が見込めず、支出においては期の途中より消費税が 8% になることから、より一層節約する必要があると説明された。以上、2 号議案も拍手を持って承認された。



=====新春懇親会=====

総会終了後記念撮影を行い、12時丁度より深田事務局長の司会で懇親会を開催した。最初に「東日本大震災3周年を迎えた大勢の方々」に全員が起立して黙祷をささげた。ついで、鎌田会長が「被災された方々が安定した生活を取り戻すには、まだまだ相当な時間がかかる。現在、県内の仮設住宅には22,862名が生活されている。この方々にはっきり分かるような、眼に見える形での復興が進んで欲しい。今年も岩手、宮城、福島の3県人会合同で3日間街頭募金を行うので積極的な参加を望む。また、来年は本県人会60周年があるのでそれに向けた準備があり、皆さんと共に「親睦の会」として改めて有意義な年にしたい」と述べた。次いでご来賓として猪久保健一岩手県大阪事務所長からご祝辞をいただいた。本県人会への謝辞、地元の復興状況、大阪で開催されたS1グランプリに久慈市が輝いたという明るい話題を披露されたほか、岩手県知事の祝辞を代読された(別紙)。

乾杯の準備時間を利用して、新会員の紹介が司会からあった。以下のとおりである。小山文男氏(一関市)、加藤忠氏(北上市)、佐藤秀蔵氏(一関市)、澤田龍氏(豊中市)、長山幸悦氏(二戸市)、古川雄二氏(県事務所)、山田清敬氏(盛岡市)。

乾杯は藤原副会長の発声で行われ、その後しばらく食事、歓談の時間となった。

<ソプラノ独唱、新舞踊、わらび座の踊りとカラオケ>

余興の最初は、堯律子前会長のお力添えでお呼びしたソプラノ歌手、大阪音大他4校で講師を勤める田中郷子氏の独唱であった。ピアノ伴奏は「ミュージカル劇団・どんぐりコール専属ピアノ奏者」金丸清志氏である。「愛燐々、テネシーフルツ、初恋(石川啄木)、早春賦、エーデルワイス、花は咲く」を熱唱され、その声量には圧倒された。アンコールの声に応じて更に1曲、予想していなかったらしく譜面の用意がなくて伴奏なしで披露された。鎌田会長が「この懇親会始

まって以来、最高」と激賞した。次は、佐藤俊三氏の新舞踊・萬代(よろず)の舞で、羽織、袴の正装による華麗な踊りを披露された。おめでたい踊りを92歳になるというご長寿の方が踊り、二重にめでたいことであった。次は「わらび座の俳優」駒野谷咲子氏が、3月9日の東北芸能祭(in堺)のPRを兼ねて新年のお祝いに駆けつけてくださり、秋田音頭の歌と踊り、山形花笠踊りを披露し大きな拍手を浴びた。

その後のカラオケタイムではのど自慢の方々により数曲が続き、最後に「北国の春」を女性陣中心で合唱され幕を閉じた。最初のソプラノ独唱に圧倒されたせいで、例年に比べ今ひとつカラオケが盛り上げに欠けた?と思うのは、司会の不手際を棚に上げた私の僻目(ひがめ)であろうか…。

<抽選会と中締め>

恒例の福引・抽選会に移り、鎌田会長が箱から抽出した番号と受付でもらった番号とを照合。景品は、鎌田会長のご友人が丹精こめて作ったお米(2kg袋)が7本、2千円の商品券20本、他に千円の商品券が漏れなく当たるよう計画されていた。今年はありがたいことに景品資金への役員寄付が多くなったせいで「空くじなし」が実現した。また、多くの役員が当たった商品券を返上してくださりその金額は¥31,000で26年度の会計にご寄付としてお受けした。最後は熊谷克巳副会長の中締めスピーチで締めくくりお開きとなった。

<募金箱と額縁入り写真とカレンダーの寄贈>

懇親会入り口に置いた募金箱には¥9,000の尊い義援金が寄せられた。松坂定徳顧問から額入り写真6枚が、テレビ岩手の石森彰支社長よりカレンダー5枚の寄贈があり、自由にお持ち帰りいただいた。帰りには全てなくなっていたので、何人かは引き換えに募金をしていただいたものと思われる。

なお、帰りには岩手県産(株)が選定した郷土のお土産が、また大阪事務所の計らいで「岩手の観光カレンダー」を参加者全員にお持ち帰りいただいた。

<岩手県大阪事務所長

猪久保 健一様 ご祝辞>

本日は関西岩手県人会の総会および懇親会に来賓としてお招きいただきありがとうございます。昨年は公私にわたり大変お世話になり感謝申し上げます。本年もどうぞよろしくお願ひ致します。大阪事務所は観光、物産振興をはじめとして、いろいろな岩手県の仕事をチームとして順調に進めさせていただいております。特に震災復興支援においては、関西岩手県人会の皆さんに多大なるご協力をいただきまして、数多くの復興イベントをこなしてきております。その関係で少し地元の様子をお話しさせていただきます。災害公営住宅については6割の取得が済んでおります。被災事業所については再開を含めて8割、港に関しては7割方の水揚げが戻ってきてます。今年は復興への取り組みを強化し、「本格復興推進年」として発信して参ります。ご支援のほどよろしくお願ひ致します。

最後に、岩手に関わる話題があります。先週木曜日（1月23日）に大阪住之江区の相愛大学において「S1グランプリ」がありました。「減塩レシピ」に基づく料理を作成して美味しさを競うもので、全国から400近い応募があった中で、24グループが全国大会に進出、岩手からは2チームが参加し、そのうち岩手県久慈市の久慈保健所チームが見事S1グランプリに輝きました。久慈といえば「あまちゃん」で有名になりましたが、「アマノミクス定食」を発表して、50歳代の3人のおば様方が、海女の格好をしてプレゼンテーションを行いました。なんと賞金は100万円。以上、明るい話題を紹介して私の挨拶に代えます。



<岩手県知事 達増 拓也様 ご祝辞(代読)>

平成26年度関西岩手県人会総会および新春懇親会の開催にあたりお祝いを申し上げます。関西岩手県人会の皆様には、輝かしい新春をお迎えのことと心からお喜び申し上げますとともに、ふるさと岩手の発展のため日々から多大なご支援、ご協力を賜っておりますこと、また、東日本大震災津波からの復旧・復興に対して数多くのお力添えをいたしておりますことに、改めて心から御礼申し上げます。

被災地では、東日本大震災津波から間もなく3年を迎えようとしています。多くの方々からの心温まるご支援や励ましをいただきながら、復興に向けて一步ずつ歩み続けております。震災を乗り越え、真の復興を成し遂げ、「希望郷いわて」を実現するためには、被災地の生活・産業基盤整備などの取り組みはもちろん、岩手の将来を見据えた中長期的取り組みが重要となります。特に大きな経済効果が期待される、国際リニアコライダーの誘致については、研究者組織であるILC戦略会議の立地評価会議が昨年8月に、岩手と宮城にまたがる北上山地を国内候補地としに選定しました。大震災からの復興のための国家プロジェクトとして非常に重要な事業でありますので、郷土岩手への誘致に向け、皆様のご支援をお願い致します。

本県では世界遺産平泉やNHK連続テレビ小説「あまちゃん」の効果もあり、全国から数多くのお客様をお迎えすることができました。観光の力で復興の歩みをさらに加速させるよう、オール岩手で取り組んでいるところでありますので、更に多くの方が岩手を訪れるよう、岩手の良さをアピールしていただきたいと存じます。

また、平成28年度には、第71回国民体育大会と第16回全国障害者スポーツ大会が開催されます。この大会は復興のシンボルとして開催するものであり、大会の成功に向か、関係者が一体となって準備を進めているところでありますので、皆様も、郷土で開催される大会が成功するよう、応援をお願いいたします。結びに、関西岩手県人会の益々のご発展と、ご参会の皆様のご健康、ご活躍をお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

「奇跡の1本松」の写真 — 岩手大学博士課程の高橋修三さんから寄贈 —

松坂 定徳さん(県人会顧問)

■被災地・陸前高田市の現状■

昨年10月、親戚の結婚式に出席するため盛岡市に行った。ついでに陸前高田市都市計画課に用事が有ったので陸前高田市に連れて行って頂いた。当日は日曜日の午後であり小雨混じりのお天気でしたが、従弟の都市計画審議会委員長に新しく宅地に成る場所の気仙町今泉地区の高台造成地を案内して頂いた。ここが宅地に完成すれば市街地になるのであろうかと思いながら工事現場をつぶさに見せて頂いた。僕等の気仙尋常高等小学校の木造校舎が有った裏山である。子供の頃から地形を熟知した「愛宕山」である。子供の頃はムササビや日本カモシカが棲む鬱蒼とした山頂であったが、今は丸坊主の姿になり、表土は剥がされ赤茶けた山肌は痛ましく感じた。実は震災直後に、市役所の職員が落着いて

考える余裕も無かろうと思い、同地区出身の部長さん宛に浸水した宅地を嵩上げする用土には愛宕山を削って埋め立て用土に利用し、神戸港の埋め立て方式を取り入れてベルトコンベア方式で山土を搬出すれば気仙町今泉地区の嵩上げ用土には十分使用できる、と提言をしていた。

宅地造成業者には、政府系大手建設会社が落札し、高さ50メートルもある大きな鉄骨の主柱を建設し土砂を運ぶベルトコンベアを設置して搬送する準備が出来て居た。計画としては浸水した宅地は5メートルから8メートルを嵩上げして更地になった宅地を再生し、土砂を削った愛宕山は海拔40メートルの高台造成宅地に変貌することになって居る。

陸前高田市に限って見れば瓦礫の処分はほぼ終わり、次の段階に進もうとしている様に見えるが、建設作業員も少な

く資金も欠乏していて思うように進展していないと言う。外部から見る目と被災地の実情とは大分見方が違うようだ。大きな家に住んで居た人が二部屋と台所の仮設住宅に我慢していることに限界を感じている。

■ 同級生に会う ■

建設現場を視察した後に、小学校の同級生である安倍 登君と市役所の停留所〈高田駅〉の待合室で会うことにしていたので、その場所に向かった。そこには村上 弘一郎君と河野 徳之助君も来てくれていた。みんな危機一髪で生き延びた連中である。村上君は朝日新聞の報道記事で見たが、波に呑まれて流されたが山の雑木に纏まり助かったと書いて居た。どこか喫茶店にでも行って話をしようと探したが、訪ねて見ると日曜日のためか客が無いのか、どこも開いて居ない。偶々従弟が市の古文書会で使用している教室の事務員が居て30分だけ教室を借用して呉れたので、ここで打ち合わせ会を開いた。①同級生の消息を調べる。②住所録をつくる。③震災の犠牲者が7、8名居るので供養したい。④生きていても仮設に住まず連絡先が分からない人も居るので住所を確認する。等を決め、安倍君を中心となり纏める。また会うことを約束して別れた。みんな81歳を超えた爺ちゃんであるが、同級生に会うと皆青年の様に元気だ。

■ 鶴亀鮓へ ■

同級生と別れて、従弟と二人で夕食をする処を探したが、客が居ないのか休日なのか営業している店が無い。鶴亀鮓なら無理にでも開けて呉れるだろうからと行って見たら、電気が点いて居ない。従弟が交渉に行くと言うので、「大阪の松坂が一緒だと言って呉れ」と頼んだ。「今、明けるからチヨット待って呉れとのことです」と言う。主人は阿部 和明氏で実兄は氣仙大工の研究者であり、氣仙金山の研究者でもある平山 憲治氏である。また、大阪市が菱垣廻船浪華丸を堺の日立造船で建造した時の七人の侍の一人でもある。阿部 和明氏の長男を大阪北区の北新地の和食料理専門店で修業させたいと言うのでお世話した仲もある。「準備が出来たのでどうぞ」と案内してくれた。仮設の店舗であるが、1階は調理場とカウンター席、畳の

座席があり、2階には30人位の宴会が出来る部屋も有った。長男の真一郎君が「あの時はお世話になりました」と最敬礼して迎えてくれた。中に入ると電車の車両に貼り付ける程もある大きな「奇跡の一本松」の写真が飾ってあった。我家の4代目の松坂新右衛門定宣が植栽した高田松原で1本だけ残った「奇跡の一本松」である。親しみを込めて誰から寄贈されたのか聞いた処、震災時の様子を滔々と説明して呉れた。地元の「3・11の語り部」に相応しい阿部店主である。危機一髪で寝たきり老人を助けて、共に助かった。もう一人助けようとして見廻りに行った地区の役員の人は波に呑まれた。生死の分かれ目になっていた、と。今では滅多に頂けない醉仙のお酒と新鮮な刺身やお寿司で満足して二人の宿泊先まで車ごと送って頂いた。

■ 奇跡の一本松の写真を戴く ■

その時、額縁入りの小型の一本松の写真があるからと、届けて呉れた。その写真の裏に名刺が貼ってあった。名刺には岩手大学工学研究科博士後期課程電気電子・情報システム工学専攻。高橋 修三 (SHUZO TAKAHASHI) と書いてあるので、鶴亀鮓から一枚の写真を戴いて来たと、お礼状を差上げた。すると自己紹介の手紙や兄が警察官で陸前高田の幹部派出所長として勤務していたが津波で殉職されたとのこと。陸前高田に特別な思い入れが有るようだ。兄の所長さんは社会人学生の修三氏の勉学の成果を望み、兄弟愛を綴った新聞記事などと共に農家が使用する米袋に進呈先を明示してどっさり一本松の額縁入り写真を主体に送ってきた。「関西岩手県人会」と明記して有る写真を関西岩手県人会事務局にお届けしたところ、総会後の懇親会の会場に陳列し、募金箱と写真を展示した処、募金箱には9,000円が入り、写真は全部無くなってしまったと岩手大学農学部出身の深田事務局長から報告を受けた。提供して戴いた高橋 修三氏に厚くお礼を申し上げると共に、3・11の津波で被害を受けた岩手県の子供達のために育英資金に協力すべく、今年も「大阪梅田」や「難波」で、「豊中市」で、「神戸市三宮」で募金を行うことにしており、併せて岩手県に献金することにしています。殉職されたお兄さんの供養にもなるものと思います。

会員
サロン

蒙古来た・・・(前号のリレー)

鈴木 綾子さん(大船渡市出身)

夕方になると「さあ、もうごくるがら、はやぐ家に入れ」、遅くまで遊んでいると「もうごにつれいでいがれるぞ」と脅かされたものです。1944(昭和19)年生まれの私ですから、「蒙古」で脅かされたのは1950(昭和25)年から1955(昭和30)年ぐらいまででしょうか。岩手の県北だけでなく県南でも使われていたのです。

「もうご」より新しいものは「まっかさ」でした。「そら、まっかさ来るぞ」「まっかさに喰われるぞ」、この「まっかさ」もまた、何のことか全く分からぬものでした。わたしには、どうしてかこっちの方がより怖いものに思えました。「まっかさ」とは、木の二股に分かれたところから出てくる怪物と勝手に想像して、ほんとうに怖いものと思っていました。それにしても、終戦

直後の岩手の田舎にまで、マッカーサー元帥、アメリカ占領軍の怖さが浸透していたのですね。

姉などは、アメリカ軍に皆殺しにされるのだと本当に思って、友達に「ほんでえ あどあ あの世で会うべしね」と言って別れ、男子などは学校の帰り道、「どうせ殺されるのだから」と自棄(やけ)になり、道端近くの「かぼちゃ」を棒などでたたいたり、つるを切ったりして帰ったそうです。後でずいぶん叱られたそうですが、それくらいマッカーサーは怖がっていたのでした。

1935(昭和10)年生まれの姉達は、「マッカーサーとは誰なのか」「怪物ではない」ということを、知っていたのかどうかは分かりません。

関西でのつながりを 大切にしたい



震災を機に、県人会に加入された大船渡出身の金本栄子さん。
大船渡の思い出とふるさとへの思いをうかがいました。（編集部）



■ 幼い頃の記憶 ■

私の最初の記憶は、昭和 35 年 5 月 24 日早朝の「チリ沖地震津波」から始まります。

当時、大船渡市大船渡町茶屋前に住んでいた家族は、全員無事で建物も流されずに済みました。そして翌日には妹が誕生しました。幼かった私は何度も夢でうなされることがあり、なかなか寝付けずには親を困らせていました。状況が全く把握できないまま、小学校で観た 8 ミリビデオで実事を知るわけですが、それでも怖い夢は続いておりました。

小学校の時は大きな地震が起きる度に、生徒全員校庭に並ばされ、点呼を取った後、父兄の出迎え無く各自で下校していました（3 月 11 日には、母校も津波の被害を受けました）。

そう言った事は、1 度や 2 度どころでは無かった訳で、当時は、自宅の津波被害の有無に関わらず、判断力の無い児童を危機感無く、各自で下校させていたって事なんですね。更に私はノンビリと自宅側の川沿いを歩いて帰ってました。周囲の大人が川の水位を確認する姿を覚えております。今思うと、何事もなく無事でいられたと言うのが、奇跡であり、本当にゾッとしてしまいます。石巻の友人は大きな地震が来たら「てんでんこ」と言われて育ってきたそうです。つまり自分の身は自分で守る。身を守るためにには助けに戻ったりせず一人で何とか逃げろって事ですよね。はたして、その時、自分だったら…年老いた家族を幼い子供を放っておいて逃げられるでしょうか…。

■ 関西で得たふるさとのつながり ■

ちょうど神戸の震災の翌年、縁あって老母と二人、開業することになった弟を頼りに大阪に引っ越しして來ることになりました。

こちらには友人が少なく同郷の方々との縁が欲しいと常々思っておりましたが、3 月 11 日の震災の後、被災 3 県で募金をされている県人会の皆様をニュースで知り、居ても立っても居られず私なりに何かお役に立てないかと県人会のホームページを見つけ連絡を取りました。

今の所、募金活動と大船渡の秋刀魚祭り位、他は県人会で知り合った方々とのつながりを大切にし時間の許す限り色々なイベントに参加させて頂いております。

昨年、さんりく・大船渡市人会に参加している友人に会う為、久々の観光も兼ね、東京タワーで開催された「大船渡秋刀魚祭り」に出かけてきました。開業 55 周年を記念したイベントと 5,555 匹の秋刀魚無料配布に長蛇の列、お客様気分も吹き飛ぶほどの状況でした。かなりの混乱状態ではありましたが、天候にも恵まれ大きな事故もなく終えることが出来ました。



昨年、東京タワーで開催された大船渡秋刀魚祭り

以前、帰省中の機内で（残念ながら仙台止まりですが）ボランティア活動をされている方と接する機会がありました。隣席に乗り合わせた神戸の女性は、虐待を受けた子供達を救うための支援活動をされておりました。

震災で家や職を失い、精神的にも余裕の無くなった大人が捌け口として弱い子供達を虐待する…暴力、無関心、離婚、育児放棄等々、勿論、震災だけに限った事ばかりではなく社会全体に余裕が無いって事ですよね。

仮設住宅に住んでいる友人や知人から聞き、未だ慰問に通い続けている方も多いのに驚いております。演劇、音楽、落語、ヘアケアやネイルアートなど様々なジャンルの方がいらしては集い、笑顔を届けて下さっています。

特に熱心に応援して下さっているのは関西の方が多いように見えました。東北は遠く時間もかかり、交通費もバカにななりません。地元出身者でもなかなか簡単に帰省することが出来ないので何度も足を運んで下さる皆様の温かい気持ちに頭下がる思いです。

既に専門分野での講演や地元の講演などは何度もされておられると思いますが、故郷を離れ様々な分野でご活躍されている方々のお話も県人会としても聴ける機会を持てたらと願っております。

離れていても忘れない

昨年の新春懇親会の場で、被災地支援を目的としたエコたわしを販売させていただきました。たくさんの方にお買い上げいただき、売り上げは全て作り手である大槌町のお母さんたちへお送りすることができました。発災直後から沿岸地域に通い、エコたわし作りのお手伝いをしている花巻在住の岡部さんにこれまでの経緯と現在の活動の様子をお聞きしました。（編集部）

おおつち
エコたわし
活動報告

関西岩手県人会の皆様こんにちは。花巻市に住んでいる岡部慶子と申します。2011年3月11日に起こった東日本大震災以降、内陸の花巻から沿岸に通い、現在は大槌町の女性4名が作るエコたわし（アクリル毛糸で編まれるたわし）の販売をお手伝いしています。

大槌町の皆さんとの出会いは、震災から約1ヶ月経った頃、小さなお寺に50人ほどで避難生活をされているところに支援物資を持っていったことにはじまります。

震災直後、私の住む町も数日間ライフラインが回復せず、商店もコンビニも閉店していて、車で暖は取れるもののガソリン不足などもありパニックになりました。けれど、沿岸の人たちを思うと、家族が無事で、家があることだけで有難く、それ以上どうこう言うなど申し訳なく思っていました。私の家から被災地は車で2時間です。何かできることはないか、という思いは日に日に募りました。そんなことを自分のブログで綴ると、たくさんの反応があり、一般車両も通れるようになってからは、皆さんから預かった物資を運ぶ生活が始まりました。そんな中で、後にエコたわしを作って下さる皆さんと出会ったのです。

■毛糸と針のおくりもの ■

震災から4ヶ月、衣類や食器類などに混じって、毛糸の支援物資が私の手元に届きました。編むための道具や本も入っていました。避難所での生活は忙しそうでしたし、何より編み物をする心境なのかどうか不安に思いつつ持って行ってみたところ「私、たわし編んだことあるわよ」という方がいらしたの

で、ひとまず託してきました。数日後、またその避難所を訪ねると、なんといつもたわしが編まれていたのです。そして、作った方々が楽しそうに説明してくれるのです。とても嬉しかったです。その後、行く度にたわしの数が増え、作る方も増えていきました。

夏（2011年8月）になり、避難所から仮設住宅への引越しがはじまりました。今後の生活、収入源、きりがない程の課題を抱えたままで。物資を配る支援にも限界が見えてきて、次にできることを思案した挙句、提案したのが「毛糸のたわしを作ってもらってインターネットで販売すること」でした。試しに、これまでの作品を預かって知り合いの飲食店に置いてもらったところ、すぐに売り切れたのです。そうして、この活動は始まりました。

■全国に広がる想い ■

避難所を出た後、たわし作りを続けられる方は4名になりました。時々集まって、お茶を飲みながら毛糸を編む時間に救われたと、後になってお話をされました。今も新商品の開発など「勉強会」があります。お客様のリクエストに基づいてオリジナルのたわしも制作します。

これまでに制作した数は約7,000個以上。インターネット上で見つけて購入して下さる方々の用途としては、復興支援イベントでの販売が一番多く、それ以外では、お寺が檀家さん用に、結婚式でのプチギフト、クリスマスプレゼント、ご自宅用など様々です。



津波で壊滅的な被害を受けた大槌町。岡部さんが通っていた避難所・大徳院（写真中央）と当時の様子（右）

また、新聞や雑誌、地元タウン紙などにも取り上げられ、企業の懸賞プレゼントとして採用されたり、東京での復興支援トークショーに作り手さんが呼ばれるなど、大きく紹介していただきました。いずれも、被災地に思いを馳せるきっかけとなっていることがあります。見た目の可愛さとしっかりした作りが評価され、リピーターも多いです。可愛すぎて実際たわしとして使えない、という声も聞きますが、作り手さんたちは「ぜひ、どんどん使って下さい」とおっしゃいます。エコたわしは、洗剤要らずであることから、環境に優しいということで「エコ」といわれています。沿岸に住む皆さんにとっては「台所の下が海」であり、水を極力汚さない生活というのが自然に身についていらっしゃるようです。

もうすぐ震災から3年が経ちます。4名のうちのお1人は、震災時に全壊判定を受けた家を修繕し引越しをされました。が、あの3名は今も仮設住宅に住んでいます。そもそも2年ということで建てられている上に、自然環境の厳しさがありますから、いろいろと綻びもでてきているようです。それでも、いつも笑顔で注文に応じ、可愛いエコたわしを編んでくれています。

売り上げは全額作り手さんにお渡ししていますが、その中から毛糸などの材料費も捻出されているため、時給計算するとわずかになってしまいます。それでも、収入があることはありがたいとおっしゃいます。家の中で空いた時間にできること、また、何かやることがあることだけでも助かると。

■これからも忘れない ■

離れていてもできることは何か、それは忘れないこと。今もそこに暮らす人々のことを。そして、「忘れていませんよ」と伝えることだと思います。私も小さな子どもが居ますが、いつも「見て!見て!」と言います。見ていると張り切れます。見守られている安心感があれば、新しいことにチャレンジする勇気も湧いてくるのではないか、そう信じて、小さな活動をこれからも続けていきます。エコたわしの作り手の皆さんとのご縁もずっとずっと大切にしていきたいと思っています。

たび
日記

八幡・枚方界隈の「小さな旅」から

平野 良夫さん（花巻市出身）

「空席があるので参加しませんか!」との電話に誘われ、待合せの京阪八幡市駅から最初に訪れたのは、二宮忠八が私財を投じて自邸に創建した飛行神社。故人の想いや業績、そして航空関連の数々の資料と共に、大阪湾から引き揚げられた零戦エンジンの残骸が今も心に残る。

神社背後の男山で、1千年余りの歴史と信仰があり、三大八幡宮の一つである石清水八幡宮では、「本殿の八幡造りとは…」に始まり、本殿を真正面から拝見せぬよう僅かに傾けた南総門とか、鬼門を封すべく角を切り取った石垣等々、初詣や孫の七五三等で幾度となく訪れていたものの、初めて見聞する説明に納得と感激。

男山を挟んで神社と逆側にあり、400種余りの竹が茂る池泉回遊式日本庭園と美術館からなる松花堂で、所謂松花堂弁当を食したが、ここ吉兆で頂くのも初めて。

大槌工コたわしチームのみなさん



活動の様子は：<http://homepage1.nifty.com/snowparadise/ecotawashi1.htm>

岡部 慶子さん：1973年東京生れ。
岩手県花巻市にて夫と4歳、6ヶ月の子どもと4人暮らし、イラストレーター。雑誌・本・Webサイト用のイラストや地元の食文化・風景などを描く。著書に「線で描く街角スケッチ帖」(山海堂)、ブログ「スケッチ日和通信」(<http://sketch-biyori.cocolog-nifty.com/>)日々のことや大槌工コたわしの近況など。



次いで訪れたのは繼体天皇が即位(507年)し5年余り宮を営んだとされる樟葉宮跡。枚方在住40年近い私がなかなか訪れる機会を持てずにいた枚方八景の一つでもあり、古色蒼然とした杜の木立が、一層古代へ誘う感がした。殊に天皇系図として神武以降9代迄の神話時代、10代・崇神が25代・武烈で途切れ、26代・繼体以降が現代に通じる(と記憶)旨の三王朝交代説が忘れ難い。

最後は阿豆流為・母禮之塚碑がある牧野公園。関係者のお力添えで7年前立派な石碑が建立された。30年前に散歩途中で目にした小さな石塔が、当時のままで残っており安堵した。尚、牧野の桜も、枚方八景の一つ。

この旅(昨年11月30日)の主催は奥州会で、微に入り細を穿つ説明は、元大阪市立博物館館長の森口 隆次さんでした。

全国高校弓道選抜大会 男子個人 盛岡一高 2年 佐藤選手が準優勝

第32回となる全国高校弓道選抜大会が、平成25年12月21日(土)～23日(月)の3日間、大阪市中央体育館(大阪市港区)で開催された。男子個人の部は98名の出場があり、岩手県からは盛岡一高2年の佐藤怜音(れお)選手、黒沢尻工業高校の菊地亮太選手が出場した。両選手とも予選を通過し決勝進出の20名に残り、特に菊地怜音選手は愛媛県立宇和島高校の選手と優勝争いを演じ、残念ながら優勝は逃したものの準優勝に輝き、しかも男子技能優秀者にただ一人選ばれる栄誉を得た。菊地選手も健闘したが上位八位までの入賞には至らなかった。

女子個人の部には盛岡市立高校の北湯口選手、岩谷堂高校の伊藤選手が出場したが、48名中決勝15名に残れな

かった。男子団体は全国51校で争われ、岩手県代表の不來方高校が決勝16校に入り健闘したものの、残念ながら入賞の上位8校には残れなかった。女子団体の岩谷堂高校も51校中決勝の16校に残れなかった。以上、昨年暮れにはるばる岩手から来阪し活躍した高校弓道選手のニュースをお伝えした。本大会の主催は「全日本弓道連盟、全国高校体育連盟」で、大会スローガンは「東日本大震災復興支援」とどけようスポーツの力を東北へとなっていた。(編集部)

黒北2回戦突破ならず～第93回全国高校ラグビー大会

花園ラグビー場で行われた、第93回全国高校ラグビー大会に2年連続出場の黒沢尻北高は、1回戦熊野(和歌山)に36-3で快勝したあと、2回戦で、Bシードの報徳学園(兵庫)と対戦したが、0-55で敗れ、2回戦突破はならなかった。この試合、超高校級の梶村をはじめとする報徳学園の怒濤の攻撃に、黒北のディフェンスラインは次々に破られ、トライの山を築かれた。攻めても、報

徳の固い守備を突破することが出来ず、ノートライに終わった。力の違いを見せつけられた試合ではあったが、突き刺さるタックルを随所でみせるなど、黒北は最後まであきらめず、力を出し切った。強豪との対戦で得たものは大きな財産となったに違いない。旧制中学時代から続く伝統のバンカラ応援団のもと懸命の応援を続けたスタンドの生徒たちに拍手を送りたい。(編集部)



● 岩手と関西をむすぶニュースを更新! ●

関西岩手県人会ホームページ

<http://www.iwate-kansai.com/>

「県人会トピックス」では、主に会の活動報告と、岩手県から届く復興だよりを。「県人会ひろば」では、主に関西で開催される岩手関連の催事案内や、会員からの案内・報告などをそれぞれ掲載しています。ぜひご覧ください。

中でも「県人会ひろば」は文字通り会員の交流の場です。そのためブログ機能をつかって誰でも投稿できるようになっています。感想などはコメント欄へ。また会員の方は記事を投稿することもできます。希望される方には入力方法をおしらせしますので事務局までご連絡ください。

bonjour@xj8.so-net.ne.jp (中野さん)

岩手をテーマに活発な情報交換のできる「ひろば」を目指しています。催事案内はもちろん、「岩手の〇〇にでかけてきました」「岩手のおいしいもの見つけました」「関西で岩手とつながる事柄を知っています」「岩手と関西でこんな取り組みをしています」など会員の方からの投稿もお待ちしています。

3.11 を忘れない！街頭募金に協力を！

3月11日で、あの未曾有の被害をもたらした東日本大震災から3年になる。いや4年目に入ると表現する方が、今の状況を考えるときに適切かもしれない。

陸前高田市で計画されている土地区画整理事業は、岩手県全体の半分を占める広大な広さだが、ダンプカーやショベルカーなどの大型重機が行き交い、本格的な宅地造成に向けた試験盛り土や土砂の仮置きなどが、3年経ってようやく始まっているようだ。

その一方で、例えば大槌町では、震災前の倍以上の高さ14、5メートルの防潮堤建設を前提とした街づくりが進んでいるが、住民からは、それで本当に海と共存する生活が成り立つのかという疑問の声も出るなど、復興のスピードが遅くなつたとしても、住民本位の街づくりを・・・という声も出てきている。

三陸のいのちである漁業は、津波で壊滅的な被害を受けたが、懸命の努力の結果、登録漁船の数や、カキやホタテなどの養殖施設は、震災前の8割方まで回復し、加工関連施設も着工130か所のうち104か所で整備が完了している。これに伴い漁獲量も7割まで回復している。ただ将来に不安を感じる若い後継者の流出に歯止めがかからず、漁村集落での人口減少が深刻な社会問題となっている。

仮設住宅には、ピーク時より減ったものの、3年経った今も22,686人の人たちが暮らしている(昨年11月現在)。復興計画を待てず、仮設を出て内陸部等へ移転する人たちが増えている中で、残された人たちの中には、将来に対する生活設

● 岩手発の情報を随時お届けします ●

Eメールアドレス登録のおねがい

岩手からのおしらせや、催事などの情報・呼びかけ、会報だけではお伝えできない近日のニュースなどを不定期でEメールでおしらせします。関西岩手県人会の会員の方ならどなたでも登録できます。ご希望の方は下記までEメールアドレスをお知らせください。

fukada.m@iris.eonet.ne.jp (事務局・深田さん)

〈おねがい〉

- ・メール送信の際は、件名に「県人会メール希望」とし本文にはお名前を記入下さい。
- ・携帯アドレスはPCからのメール受信可に設定できているか確認をお願いします。

3月

8日(土)大阪・梅田周辺
9日(日)神戸・三宮、元町
11日(火)なんば・高島屋前とマルイ前等
午前10時から午後4時過ぎまで

計が描けないまま、不安が広がってきている。3年が経ったけれど、復興のスピードは遅く、助けを必要としている人たちが、まだ大勢いる。それなのに、たった3年しか経っていないのに、震災に対する関心が急速にしばんできているのは、どうしたことなのだろうか？そんな中で県人会はどうあるべきなのだろうか？少なくとも、震災の風化に手を貸してはならないことだけは確かだろう。どんなに小さくても良い。どんなにささやか事でも良い。私たちが出来ることを細々とでも良いから続けて行くことではないだろうか？

震災で、両親や働き手を失った被災孤児、遺児は、岩手県には582人いる(平成25年11月末現在「いわて復興だより」より)。岩手の将来の担い手とも言える児童、生徒、学生の育英資金として、「いわての学び希望基金」が設けられている。県人会では継続して支援を続けているが、平成25年11月現在、寄せられた善意は、11,214件60億8651万円に達した。小さな水の一滴でも、集まれば大きな流れを作り出す。被災した子供たちには、例えば小中学生では、月額2万円が支給されているほか、小学校入学時6万円、小学校卒業時9万円、中学校卒業時に13万5千円が、一時金として支給されているが、まだまだ不十分だ。関西岩手県人会では、今年も、宮城、福島の両関西県人会と共同で、街頭募金を行います。3.11を忘れないで…と呼びかけましょう。募金をしていただいた方には、岩手のワカメを配ることにしています。ふるさと岩手への県人会会員皆さんへの支援を、改めて心からお願い致します。(鎌田記)